

# 「飯くわぬ女」の分析心理学的考察と摂食障害栄子の儂き実存と死

横 山 博

## はじめに

「食すること」という人間の自己保存本能なしには、人間は生きてはいけない。「食すること」を中心として、人間の喜怒哀楽があり、団欒を囲むことは、それこそ旧石器時代以来、人間の身体を滋養し、かつ獲物を獲得、ともに味合うという共同体の重要な要件を構成して来た。この人間の基本的な営みが、病として多く記載されるようになったのは、一九七〇年代頃、有名なシンガーグループ、カーペンターズのカレンが拒食症で死亡して以来であろうか。第二次世界大戦の敗北で、日本は困窮を極め、復興を遂げて行き、七〇年安保を経るなかで、混乱と少しの生活の余裕が混在する時代であった。世界史的にも、ベトナム戦争が泥沼化し、アメリカ

カでも富みの遍在、黒人問題を中心として、全世界的にカウンターカルチャー運動が吹き荒れる時代でもあった。こうした、文明の転換点の危機として「食すること」の病いがあると同時に、遠い昔話の世界にもこのモチーフがあることにも興味をそえられる。このことについて少し論じてみよう。

## 一、食することの心理学的意味

「食すること」の心理学的意味で、我々がすぐに思いつくことは、フロイト (Freud, S.) の口唇愛期である (Oral phase)。フロイトは乳児の口唇部に備給された性的リビドーが、母親の乳房から滋養としてのお乳を得ることののみならず、母親の温かさ、心音も含め、安心感も手に入れることを論じ、人間の基礎的安心感の基本であると考えた。フロイ

トはこの時期を一次ナルチシズムとし、アウトエロティシズムで赤ちゃんがまだ対象に開かれない段階と考えたが、この問題は対象関係論を中心として、論議のあるところであり、深入りは止めよう。とまれこの段階で、アウトエロティシズムが充分満足させられない時、長じて統合失調症になるとフロイトは考えた。またお乳を口腔内に取り入れることは、心理学的には、自分にとつては異物であるものを体内に取り入れ、自分を滋養し、体内化していくことの基本であり、取り入れ (intjection)、体内化 (incorporation) のプロトタイプである。幼児の指しゃぶりはその代償行為であることは周知の事実である。

フロイトの意味でアウトエロティシズムの時期はまだ、母子一体感の意味合い強く、それが男根愛期 (エディプス期) を経るなかで、母親と子どもは分離しつつ、子どもは母親と違った、父なるものや、社会すなわち共同性を自分のなかに取り入れ、子どもなりの自我を形成していく。母子一体感の強い時期においては、母と子の区別も曖昧である。つまり自分の身体と自分なるものの萌芽との区別も明確でなく、さらに母親の心身とも分離はさほどしていない。しかし、子どもは成長するに従って、自分なるものを中心として、共同性な

るものとの関わりを持ちつつ、幼児の心身一体となった原始的なレベルから離れ、身体性そのものから疎外された形での自我というものを持つに至る。ユング (Jung, C.G.) によれば、自我とは意識の中心を占めるもので、比較的安定し、恒常性を持ったコンプレックスに過ぎない。心とはもつと広く、個人的無意識と、人類が有史以来、持ち続け、時には極めて創造的であり、時は極めて破壊的となる集合的無意識、さらには身体へと繋がる、広大な領域なのである。

相対的に普通の状態においては、自我、心、身体は安定したバランスを保ち、人生の節目節目を乗り切っていく。ところがそれが様々な要因と巡り合わせ (布置) でうまくいかなることが起きる。身体、こころの病であり、その双方にまたがるものとしての摂食障害がある。

例えばDSM-IVでは以下のように定義する。<sup>1)</sup>

#### 神経性無食欲症 (Anorexia Nervosa)

A、年齢と身長に対する正常体重の最低限、またはそれ以上を維持することの拒否。B、体重が不足している場合でも、体重が増えること、または肥満することに対する強い恐怖。

C、自分の体の重さまたは体形を感じる感じ方の障害—自己評価に対する体重や体型の過剰な影響、または現在の低体重

の重大さの否認。D、初潮後の女性の場合は、無月経、つまり、月経周期が連続して少なくとも三回は欠如する。

#### 神経性大食症 (Bulimia Nervosa)

A、むちゃ喰いのエピソードの繰り返し。むちゃ喰いのエピソードは以下の二つによって特徴づけられる。(一) 他とはつきりと区別される時間の間に、ほとんどの人が同じような環境で食べる量より明らかに多い食べ物を食べること。(二) そのエピソードの間は食べることを制御出来ないという感覚。B、体重の増加を防ぐために不適切な代償行動を繰り返す。例えば自己誘発性嘔吐・下剤、利尿剤、浣腸またはその他の薬物の過った使用・絶食・または過剰な運動。C、むちゃ喰いおよび不適切な代償行動はともに、平均して、少なくとも三ヶ月にわたって週二回起こっている。D、自己評価は、体型および体重の影響を過剰に受けている。E、障害は、神経性無食欲症のエピソード期間中のみに起こるものではない。

記述的症候の特徴はこの様なものであり、昨今では、無食欲症(拒食症)と大食症(過食症)が交互に来る摂食障害と呼ばれるものが多い。先述したように、「食すること」は人間にとって個人としても、家族としても、また共同体として

も、楽しみと満足、安定感の源泉である。しからばそのような人間の基本的な営みが何故障害されるのであろうか。

#### 西欧文化においては、デカルト以来心身二元論が取られ、

身体を客体化し、ほぼ同時に出現して来る、自然科学によって、ここでは身体から疎外され、身体 of 自然科学的探索は現代の医学の発展をもたらした。こちらの方はフロイトの登場により、「エスあるところに自我あらしめよ」という形で自我の優位性の文化が成立し、近代は自我と意識の優位性、意識の整合性、科学主義の世界となった。一方、それを超えたところもあると無意識の存在を主張したのもフロイトなのであるが。この無意識の概念をさらに拡げていったのはユングであることは先に述べた。一方西欧文化はキリスト教精神に裏付けられ、垂直方向へどこまでも高く、父なる神へと伸び、一神教的世界を形成する。とすると、身体を形成する大地性より天へと伸びる精神性 (spirituality) がより重要なものとなり、身体、大地、そしてそれに属する食べることは、精神性に従属したものとなっていく。もっとも儀式としての、キリストを血肉化する聖餐式はあるとしても。ここに自我・意識による身体のコントロールのひとつの根がある。食べること、身体、大地性は暗闇への通路なのである。

日本神話においても、イザナミの腐敗、解体する姿を見たイザナキは、黄泉の国の死、醜悪さ、破壊性、暗闇性、疫病なる災いを体现するイザナミを閉じ込めて、アマテラスなる清浄の女神を産み出す。一方で、スサノオ（古事記）、ツクヨミ（日本書記）では、自ら所望しておきながら、オオゲツ姫が汚い身体の穴から食べ物を出したという理由で女神を殺す。神話はこの姫によって、五穀がもたらされたと述べる。またアマテラスは清浄さを体现する一方で、天の岩屋戸でアマテラスを洞窟から引き出すために裸踊りをしたアメノウズメは、清浄さと対極にある、猥雑性、暗闇性を示す。またこの女神は五穀豊饒を祈るシャーマニスティックな儀礼の中心を担い、食べ物と深いつながりを持つ。そしてニギノミコトが天孫降臨をする時、その前に降りたアメノウズメは、自らの性器を見せて勝負して打ち負かした、地の神サルタヒコと一緒に、清浄さと対極の、暗闇さらにはイザナミにまで通ずる、大地性、性を体现する。サルタヒコも、眼光鋭く、場を開く神としてトリックスターのような役割を日本の神話のなかで果たしている。

さらに不思議なことに、アマテラスの希望で、伊勢の地にアマテラスを祭る神社が移されるのであるが、その地は、ア

メノウズメの生誕地なのである。そしてそこに出来た伊勢神宮は内宮と外宮からなり、内宮は天皇の皇女が務める齋宮が守り、齋宮は男性を近づけることを禁止された処女でなければならぬ。一方、外宮の方は、齋宮の食べ物の世話をするために豊受大神（トヨウケノオオカミ）を移して来て、成立していく。中沢新一はこう述べる。「外宮の豊受大神は食物神として、天照大神の背後の立つような関係にある。太陽の神にも食物の供儀が必要で、自然に内在する力を形而上学的な活力に転換するこの供儀を通して、太陽の神は力を得る。この転換は外宮における豊受大神のものでおこなわれる。その意味で豊受大神はみずからのうちに闇を抱えこむこととなる。」<sup>②</sup> こうして太陽神、光の神と豊受大神、食物神で闇へと通ずるものという対極が形成される。日本文化とはこのパランスのもとに成り立っていると言える。

こうして西欧においては心身二元論から、身体を客体化し、意識が精神性へ伸びること、日本においては、イザナミを黄泉の国に閉じ込め、「食する」ことと対極の方向の清浄さを求める文化の構造が分かった。

摂食障害になっていく人たちは女性に圧倒的に多いことは周知の事実である。この病に陥る人たちは先述の文化のあり

方のなかで、思春期、前青年期に、身体性という暗闇に属することをうまく扱うことが出来ず、精神性、清浄性の方に一面的に傾いていった人たちと見てさほど間違いはないであろう。その病理性のあり方は統合失調症に近いものから神経症までさまざまであり、これはかつて筆者は論じたことがある<sup>(34)</sup>。女性性の成熟拒否という観点からは、この病の研究の第一人者である、下坂幸三が詳細に論じている<sup>(5)</sup>。ここではそのことに深く立ち入らない。ここで論じた視点からは、無食症では、本来自然である身体から切り離されて、精神性、清浄性の方に一面的になり過ぎた自我・意識が身体をコントロールしようとして、身体性から切り離される事態として理解されよう。これはユング的に言えば、アニムスに憑依された状態で、取り入れるべき性的内容や、エロスと結びついた感情的色彩は無意識へと沈められていると言えよう。また大食症では同じように狭隘化された自我・意識によって分化を阻まれた意味内容が衝動となって過食の表現として現れていると言える。過食・嘔吐という大食症によくあるパターンでは、過食によって、さまざまな意味内容を未分化のまま取り入れ、無意識の衝動を満足させ、嘔吐によってすべてを取り消し、自我・意識の衝動を満足させるという強迫性防衛機制も働いている。

る。次に日本の昔話ではいかに現れているか見てみよう。

## 二、日本昔話「飯くわぬ女」

— 広島県安芸郡 —

昔、あるところに、ひとりの男がありました。いつまでもひとり者であるので、友達が心配して「もうええかげんにして、嫁でももらたらうまい」といって、嫁を貰うようにすすめました。けれども、その男は「いつまでもまってもええが、物を食わない嫁があつたら世話してくれ」といいました。

そういつていると、ある日の夕方、その男の家へきれいな女が来て、「わたしは旅の者ですが、日がくれてなんぎをしておりますから、どうかひと晩とめてたもれ」と、宿をたのみました。男は「宿はかしてもええが、うちには食べるものがないよ」といって、ことわりました。けれども、女は「わたしはなんにも食べません。ものを食わぬ女です。泊まるだけのでええです」といって、たのみました。男はたまげただけでも、その女をとめることにしました。

女はあくる朝になっても、出ていこうとしません。いろいろ用事をしてくれるので、男はいつまでもとめておきました。なによりもよいことは、なんにも食べないで仕事ばかりしていることだ。けれども、いつまでたっても何も食わないので、

男は少したべてみいというてみたが、女は匂いだけかいどればええといつて、どうしてもたべなかつた。

男は、世の中にこんなええ女房はないと思うて、友だちに自慢していました。けれども、誰もほんとうにするものはない。そのうちに、いちばん仲のよい友だちがやつて来て、「おい、お前はどうしたんや、まだ気がつかんのか。お前の女房は人間じゃないよ。しつかりせにやいかんよ」とおしえてくれました。けれどもその男は、「そんなことがあるものか」といつて、とりあわなかつた。

「知らんのはお前だけじゃ。村じゃ大きな評判じゃよ。世の中に物くわん人間があるものか。うそじゃと思うなら、どこかよそへいくふりをして、女房に気づかれんように天井に上がつて、何をするかみてみるよ」といいました。

ある日、男は町へいくとき、「夜にならんと戻らないよ」といつて、家を出ていきました。一町ばかり行つてからもどつて来て、女房に知られないようにそつと天井へのぼつていました。女は一人になると、米をときはじめました。火をどんでん焚いて、飯を炊きはじめました。飯が出来るとにぎり飯を三十三こしらえて、台所から鯖を三匹とつて来て火にあげりました。それから立膝をして、髪の毛をばらばらほい

た。どうするか見ていると、頭のまん中の大きな口の中ににぎり飯やら、あぶつた鯖やらどんでん投げこんで、食つてしましました。

男はこれを見て、肝をつぶして天井からそつと降りて、友だちのところへ逃げて行きました。

「それみたことか、いわんこつじゃない。だがな、今日は知らん顔して家へいぬるがええ」といつたんで、男は知らん顔をして家に帰りました。いつてみると、女房は頭がいたいといつて、寝ていました。どうしたのかとたずねると、「どうもせんが、気持が悪うてねと」と、ねこなで声で答えました。「そりやいかん。薬でものんでみるか、祈祷でもしてもろうてみるか」といつたら、「わたしゃ、どうすりやええかわからん」といつて、いまにも飛びつきそうなようすをしました。

「それじゃ、おれがいま祈祷師をたのんできちやる」といつて、友だちのところへとんでいつてつれて来ました。「何のたたりだあ。三升飯のたたりだあ。鯖三匹のたたりだあ」と友だちがいうと、女はそれを聞いて飛びおき「うーん、お前たちや、見ていたのう」といつて、友だちを頭からがしがし食いだしました。

男はひどくびっくりして逃げようとする、女は友だちを食ってしまうとその男をとらえて、子猫のようにぶらさげて

頭の上のせて、さつさと山の方へ逃げて行ってしましました。そうして、野をこえ、山をこえて、うさぎのようにかけ行きました。森の中にかかったとき、目の前に木の枝が突き出ていたので、男はしめたと思つて枝にぶらさがりました。飯食わぬ女房の鬼はそれとも気づかないで、どんばんかけて行きました。

男は木からおりて、そこのもぎとしようぶのくさむらの中に、そつとかくれています。すると鬼女は男のかくれているところに引き返して来て、「お前がどこにかくれていますか、逃がすものか」といって、とびかかろうとしました。けれども、もう少しというところまでびのいて、「ああ、うらめしい。よもぎとしようぶぐらい、このからだに毒なものはない。この草にふれたらからだが悪くなるんじや。その草がなかったら、お前も食つてしまうのになあ」といって、たいそう残念がりました。男はこれで大丈夫だと思つて鬼に投げつけました。さすがの鬼も毒にかかつて死んでしまったそうです。<sup>(6)</sup>

### 三、「飯くわぬ女」の分析心理学的解釈

飯くわぬ女の物語は相当幅広く日本中に広まって採取されている。このことは、先に論じたとおり、人間にとつての食べることの重要性を示しているし、物語の採取された時代における窮乏の問題がよりいっそう食べることの重要性を際立たせている。ここでは分析心理学的に視たところの問題として、この物語を心理学的に見てみよう。作者不明であり、あちこちで語り継がれていることは、ユングの概念に従えば、こころの骨格としての心的パターンすなわち元型的イメージ (archetypal image) を示しているからである。

物語の出だしは、「昔、あるところにひとりの男がありました」とある。どうも寒村であり、森からさほど遠くなく、むしろ町へ行くと、「夜にならんと戻らないよ」と女に伝えていることを考えると、町からは相当遠いようである。これは現実世界から相当遠く、むしろ無意識を象徴的に示すことが多い森に近いことから、この男は異界との境界に住んでいるようである。森とは日本では山とほぼ同じ意味で使われることが多く、この物語でも区別はあまりない。森(山)には、日本民俗に遍く登場する山の神が住み、それは耕作期に

は田の神として里に降りて来る。また狩りの神として重要な役割を果たす十二様という女神も住むところである。と同時に、鬼も山に住み、山姥も住んでいる。さらには、祖霊とも深く関わり、仏教では、死後四九日までは、死霊は山の端を彷徨うという。かように山はさまざまな意味を担って人間と関わっている。つまり狩猟、採取などを通して、豊饒と関わりるとともに、自然神として超越なるものと関わりると同時に、自然の猛威、人間を喰らう鬼、山姥として破壊的なものとも関わり、その様相は無意識なるものそのものである。日本の山々はその深い森とともに何と多くが、その山自体、御神体になっていることであろう。

この山際の小さい寒村に男はひとりで住んでいる。親も兄弟も誰も親族がない孤独な生活を送っている。しかしまったく孤立している訳ではない。友だちがひとり者である男に嫁をもらえと勧めてくれる。男はそれに応じないばかりか、「飯くわぬ女」なら良いと答える。不思議なことである。おそらく男は二〇代か三〇代であろう。異性を求めて当然の年齢である。にも関わらず、「飯くわぬ女」という人間ではあり得ない存在ならば良いという。これは、単なる彼の吝嗇さ故の問題であろうか。そうではあるまい。現在の恋愛観や結

婚観の通用しない足入婿の時代であったとしても、異性への思いは古事記、万葉集の時代から、否、人間の歴史の始まりから、エロス原理の重要な表現としてずっと存在し続けているのである。家父長制の時代で、足入婚で男性が優位に離婚出来る文化であったとは云え、この男の吝嗇振りは度が過ぎていた。よって彼は異性とエロスによって繋がる事が出来ない問題を持っていたと言えよう。このような男の場合、彼の女性イメージは、「浦島太郎」の乙姫のように深い海の底のイメージとなったり、羽衣伝説の天女になったり、人間として近づくことの出来ない存在となる。統合失調症によく見られる女性イメージである。またその反対として、ギリシア神話に登場する西の国の果てに住む、髪の毛がみんな蛇で、なおかつメドウサ以外の二人は不死であるゴルゴン三姉妹に象徴される破壊的なもの、旅人を美しい歌声で川の底に引きずり込むローレライのような無意識へと誘う存在となろう。山姥もこの類型に属するであろう。

さてこの男の家に旅の女が尋ねて来て、宿を乞う。飯はないと男が言うと飯は食べないという。しかも女はきれいらしい。男にとっては願ってもないことである。しかし飯を食わぬということの不思議さを感じないばかりか、「こんなえ



え女房」はいないと自慢していて、友だちが忠告しても耳も貸さないとはどうしたことであろう。彼の行き過ぎた功利的価値観によるものか。それとも、戯画化された形で女性のきれいさのみを見て、身体にまつわる生命性にまったく無関心であるという歪んだ女性イメージなのであろうか。往々にして、男性の女性への投影するイメージはこの父権的価値観の世界のなかで男性の身勝手な「きれいさ」のイメージを女性に押し付ける。中国の纏足しかり、ヨーロッパのコレットしかりである。アノレキシア (anorexia nervosa) で始まる摂食障害も「スレンダーであること」という男性の欲望の視線も無関係ではあるまい。

それでも男は月日が経つうちにさすがにおかしいと思い、友だちの忠告を受け入れる。町へ行くと言って天井から見ていると、女は髪をばささと降ろした時に現れる大きな口に三十三個のおにぎりと鯖三匹を投げ込んで食ってしまう。

男は肝をつぶして友だちのところへ逃げる。そして友の忠告に従って、家へ帰ると、女は寝ていて、頭がいたい、気分が悪いという。薬をやるうか、祈祷師を呼ぼうかと男は声をかけるが、この時点では、もう女のこの世ならぬ存在を知っているのであり、優しさの表現でも何もない。女のねこなで

声が虚しい。祈祷師を頼んできちゃると男が言って連れて来た友だちが、女の正体をばらす。ただならぬ過食の姿であろう。にぎり飯三十三個とあぶった鯖三匹に意味があるのであろうか。それぞれのシンボリズムはどこまで問えるが不明であるが、当時の時代状況からすれば大変な量であることには間違いない。現代の過食症 (bulimia nervosa) においても、大変な量を食べる。そして食べ続ける。バター、マヨネーズなどの高カロリーのものを食する。ほとんどがその後嘔吐するが、そうしない場合もある。これらの症状は食べることにより、自我・意識の存在の狭隘化のため、抑圧され未分化となった無意識が過食の衝動となって自我・意識を襲っていると云えよう。いわば倒錯した「取り入れ」である。ここではもう既に普通であれば機能する視床下部等の満腹中枢は機能を失っている。多くの場合はこの無意識的衝動を打ち消すために嘔吐する。これは、先述したように、強迫性障害に見られる「取り消し (undo)」と類似しており、これによって自我・意識あるいは超自我の欲動を満足させる。摂食障害の人に超自我の強い、強迫性性格の人が多い由縁である。ユング的に語れば、内的男性イメージ (アニムス) が肥大し、本来は身体性として自然に属することも意識でコントロールしようと

するアニメスに憑依された状態であろう。

この女は、しかし、アニメスに憑依された男性的な女性というよりむしろ、いわゆる女性的で「きれいな」女性なのである。日本文化のなかには、齋宮制度や「御飯を縦に入れる小さい口など」美人の要件として、清楚で、性的なるもの、身体性からはずれることがよしとされる風潮は存在していた。この男の前に現れた女性とは、まさにその姿を体現した女性であった。女性的なる存在が、食すること、性的なるものを抑圧し、きれいな存在に狹隘化されると、それらとは他の部分は未分化で無意識なるものとなり、押さえ付けられれば押さえ付けるほど、人間的存在から離れるが故に、自我・意識と敵対化していく。そして、その無意識内容はアーケイツクとなり、多くは衝動となり、過食となりその人間を襲う。過食の謂われである。

摂食障害の過食は、衝動となって、その人間を襲い、多くの場合は嘔吐によって取り消しを行う。しかし、この物語の女は、それに留まらず、妖怪となる。その姿は、何もかも飲み込んでしまうグレートマザーのネガティブな側面であり、無意識なる世界へと自我・意識を引きずり込んでしまう女性的側面の負の部分であろう。ここまで来るとその姿は山姥と

なり、普通は男性の姿で描かれる鬼と同一視されている。物語の後半では飯くわぬ女は、もう既に鬼と表現されている。この女のイメージは、「きれいな」に閉じ込められた女性的存在の無意識が妖怪となる程の狹隘化されている姿を示すと同時に、他方では、この吝嗇で、功利的価値観のみを生きて、異性へとつながるエロス性に開かれていないこの男性の内的女性イメージ、すなわちユング的に言えばこの男性のアニメ性をも示している。泉鏡花の『夜叉ヶ池』では、はかなくも凄まじい女性イメージが現れる。山奥の寒村に、神主の娘で今は独り身となって村から孤立した、一人の美女が棲む。ここに東京からやって来た男性が、不思議な経緯で、昔夜叉ヶ池の龍神と村人が交わした約束、日に三回鐘を撞くことを履行することになる。男はその美女百合と一緒にこの村に棲む。ここでクロノロジカルな時間は消え、幻想的な世界に入る。村が大旱魃となっていて、龍神に生贄を捧げようと村人は百合を襲う。百合は自ら自刃し、男も後を追う。そこに龍神の化身である白雪が現れ、約束を破った村人への報復、百合を殺した事への報復で池を決壊させ、村は洪水で滅びる。白雪は龍となって身体に男と百合を乗せ、巨鐘水となって、加賀の白山、剣が峰へと去る。ここで百合と白雪は同じ

で、女性の持つ美と妖しき、破壊性を、鏡花は見事に描いてみせる<sup>8)</sup>。これもまた共同体が押し付けた美の意識に捕らわれ、身体性をも含む他の女性的部分が無意識となると、その女性的なるものの無意識が、いかにアーケイックで恐ろしいものを示している。アンデルセン (Andersen, H.C.) の『人魚姫』の物語では、下半身が魚である人魚姫が、人間である王子に恋をして、足をもらう代わりに声を失い、最後は人魚の持つ不死を失い、海の泡と消える悲しい物語である。かつて筆者のスイスでの分析家であった今は亡きヴァルグー氏 (Walder, P.) は下半身の魚の尾は女性の持つドラゴン性であると教えてくれた。これには、人間に成り切れない人魚姫の悲しさと西欧文化の人間中心性、進化論的匂いを消せないが、それでも、グレートマザー性と並んで、女性の持つ神秘性、身体との結びつきの強さを示し、摂食障害という病が女性に圧倒的に多いという臨床的事実と無関係ではあるまい。

さてこの鬼と化した飯くわぬ女だが、よもぎとしようぶにめっぽう弱い。最後にはその毒にかかって死んでしまう。このよもぎとしようぶは何であろうか。五来重によると五月四日は「女の家」の日という民俗的習慣があり、その時山からやって来る鬼を防ぐ力が、よもぎやしようぶにあり、女の家

の屋根はこれらで葺かれたことが、ここでは山姥すなわち鬼を退治する力があるとされるのではと推論している。ちなみに「女の家」とは、五月四日に女だけが集まり「夜ごもり」をし、しばしの休息をとったという習俗である。またしようぶとよもぎは邪気を祓うために、中国の端午の節句で使われたことに由来しているという<sup>10)</sup>。とまれ山姥、鬼と化した飯くわぬ女はよもぎ、しようぶで殺されてしまうのである。

類似談には、桶の代わりに瓶や甕などに入れられたりするものもあり、くもになってやって来た女を焼き殺すなど百數十話あるという<sup>11)</sup>。この数はかなりと言つてよいであろう。飯くわぬ男とは少なくとも関啓吾編の『日本の昔ばなし』にはない。このことはこの物語は女性の特質を表すもののひとつと考へてもさほど無理はなからう。次に事例を見てみよう。

#### 四、事例栄子の場合

##### ↳ 死に魅せられた儂さ

#### 1、現病歴

栄子はX年一二月に筆者の元に受診してきた。それまで二年に亘って、特別な思いをもって診療してきた先輩医師からの紹介である。主訴は、過食を主とする摂食障害と甲状腺機

能低下症である。

栄子はX―八年、一五歳時、体重が六〇kgとなり、ダイエットをして三週間で四六kgにするような過激な痩せ方をし、生理も止まってしまうところから病歴が始まった。ちなみに彼女は身長が一五五cmであるから、相当の過食が高校入学前後から始まったと推測される。高校二年時また過食が再発、五四kgまで上昇、この頃より抑うつ傾向も出現してきたが、嘔吐することもなくフィットネスクラブに通うことで体重をコントロールし、無事有名高校を卒業した。しかし、大学受験には第一志望の有名国立大学を受験するも失敗し、一浪後、志望の有名女子大に合格し、自分の好きな考古学を選択することが出来た。大学時代は、一回生は孤立していたが、二回生になると友だちも出来て比較的順調に過ごしたようである。しかしそこに、一九九五年一月一七日、あの大震災が襲う。彼女の家は大丈夫であったが、父方祖母の家が全壊し、祖母と同居生活が始まる。この祖母との折合いが悪く、それから本人は抑うつとなったと言う。

X―四年、二回生の終り、弟が遠方の大学に入り、彼の下宿探しで、母親が一週間家を留守にし、祖母との間の緩衝帯が無くなり、かつ栄子が祖母の世話をしなければならなくな

り、調子が狂ってしまう。父親は仕事中心で家には居ない。兄も大学で下宿し、祖母、母親と三人だけの生活になったのである。過食の消長強く、抑うつ感、死にたい願望が強くなり、何度もリストカットを繰り返す。大量服薬もしてしまい、X―二年には某病院に二ヶ月入院するが、入院患者にセクハラされ、大きなショックを受け、泣いてばかりいて退院する。その後、他の大学病院へ行くが合わず、筆者の勤務する病院で前医に出会い二年間通院する。栄子自身は総計七回しか来ておらず、母親が薬物を取りに来て繋いでいた。そして、前医退職により筆者に依頼された。ちなみに祖母は栄子とあまりに合わないため、近くの県営住宅で独居することとなった。

## 2、家族構成と事実的生活史

栄子は一九XX年生まれで、受診時二四歳、一歳上に兄があり、六歳下に弟を持つ。兄とも弟とも仲はよいという。二人とも大学生である。父親は有名会社の管理職で、X―二年より単身赴任で月一度帰って来る程度である。栄子の父親イメージは悪く、命令的でずつと塾に通わされ、高校も父親の意志で決めている。自分のことを「無愛想だ」と言い、それを母親のせいにしてている。仕事人間で夜しか家にいない人だ

った。父母は同じ大学で知り合い結婚している。母親は、厳しい父親から「必死に自分を守ってくれる」優しい存在である。母親も知的な人で、某私立大学で、外国語の非常勤講師をしている。

事実的な生活史を振り返ってみると、幼少時、生まれてしばらくして、父親の仕事の関係で、ヨーロッパの大きな有名都市で五年間を過ごし、現地校と日本人学校と両方に通っていた。X—一八年一月、帰国、日本の小学校に入るが、二年間ずっと虐められていて、友だちはなかったという。小学校三年時、エレベーターで痴漢に遭い、父親に告げるが、ともに受け取ってもらえず、それ以来父親との関係は修復出来ないという。小学校高学年は塾ばかりで、友だちと遊んではいたが、これといって友だちはなく、それが当たり前と違っていたと語る。中学は有名国立大付属中学を受験するが失敗し、私立女子中学校に通う。友だちはまったく作らなかった。初潮は一〇歳の時に来た。高校も有名進学校を受験するが失敗して、私立有名女子高校へ入学する。この時も父親は別の女子高校に行けと怒鳴っていたという。中学三年時に六〇kgとなり、ブルマーをはくのが嫌だったと語る。既に過食傾向が始まっていたと推測される。彼女は中学時代、暗い

子で、高校も仲のよい友だちがひとりいて泊まりにいったりして「少し遊んだ」という。後は、受験勉強と病気に苦しめられる。以後は現病歴と重なる。

### 3、見立て

生活史で見えて来た通り、生活史そのものがもの悲しい。母親、兄、弟以外とは誰とも繋がらず、いじめられ体験、痴漢、受験の挫折と痛ましいばかりである。晴れやかであるはずの小学校入学体験もヨーロッパからの転校ということで、虐められた体験から始まる。一〇歳で初潮を迎えるということから推察して、小学三年時も肉体的にはかなり早熟だったのであるうか、痴漢に遭い、それが父親によって無効化される。初潮をいかなる気持で受け止めていったのかは定かではない。しかし思春期を準備していくサリヴァン (Sullivan, H.S.) の使うギャングエージ (gang age) はまったく通過していないと推測される。そして思春期の入り口の通過儀礼の大きな儀式とも言うべき中学入学も、受験失敗ということ、暗い影を落とす。栄子は中学時代は「暗かった」とあまり語りたがらない。さらに前青年期 (preadolescence) となり、一歩大人に近づく時期にまた受験の失敗である。

ここにある自己愛の傷つきはいかばかりであろうか。過食症という病はもう背後に迫っている。衝動となった食行動と、「痩せてあらねば、この世に繋がれ切れない」という思いのなかで栄子は引き裂かれる。このような二律背反的な葛藤は当然死の衝動へと彼女を誘う。栄子の病は摂食障害を超えて人格障害 (personality disorder) の領域に踏み入れており、感情的にも、ずっと離人体験があつたのではと窺わせるほどに表現はクールであり、存在そのものが儂く、大地性から切れている。よって治療者である筆者はあえて分析的治療を持ち込まず、筆者が自ら名付ける分析心理学的精神療法を行う外来に、隔週一度通つて来てもらうという形で治療が始まつた。しばらくして面接は毎週となる。

#### 4、面接の経過

X年一二月〜X+一年一二月

#二、正月に一日だけ不安定になり、マンションの六階から飛び降りようとした。病気になるからずっと死にたいと思つてきた。昨年六月までの三ヶ月間、右手をカッターで切つていた。他、先述した生活史の事実を語ってくれる。父親と合わないと痛切に語る。治療者(以下、**宇**と表示)は過食

の衝動は、窮屈になっている自我に混沌とした無意識が押し寄せてきているものであるし、死にたい願望は、本当は、身体的に死ぬことを望んでいるのではなく、狭隘化した「自我殺し」なのであることなどを説明し、しばらく一緒にやつて行こうと話す。「自我殺し」とはローゼン (Rosen David) の概念で、サンフランシスコの金門橋から飛び降りて自殺を計り、生き残つた人をインタヴューした結果、彼たちは本当は肉体的死を望んだのではなく、行き詰まつた自我を殺し、再生しなかったのだという結論を得て、それを彼は「自我殺し (egoicide)」と名づけた<sup>12)</sup>。

#三、中三になつた時、六〇kgになつたいきさつなどを語り、二週間前から無気力となり、三日前より過食になつていと言ふ。男友だちはいたことがない、別に嫌いではないがとも。

#四、やや抑うつ気味。生理、出血が多い、過食気味となつていと語る。男性は好きになつたことはあつたが、太つていたからずっとコンプレックスがあつた。二回のトラウマは関係がなく、異性に抵抗がある訳ではないと。調子の良いのは、ここしばらくは一ヶ月で七日ぐらいである。さらに祖母との同居で母がいなくなった時の嫌な気分を切実に語る。

本当は四回生のガイダンスを受け、四月から復帰するつもりだったのに、しんどくて行けず、心療内科を受診した。

#五、風邪で本人来られず、母親が来院、過食は生理の周期に左右され、生理前に始まり、生理の途中で終る。本人も分かっている。母には良い感じを持っているようである。

#六、風邪が長引いている。#七、母親と弟とスキーに行つて来た調子は良い。#八、ずっと調子が良い。自分には感情を抑えるところがある。泣くことも恥ずかしいと思つていた。ヨーロッパにいた頃が一番自由だったと。日本に帰つてから虐められ、うつになつてから毎日泣いていた。泣かなくなったのは昨年六月頃から。#九、帰国後友だちはあつたが小四の時裏切られ、それ以来これ以上他人を入れない壁を作つた。中学校でもフルートをやっていて、先輩に可愛がられましたが中三の時ぱつと辞めた。繋がりやの薄さを感じさせる経緯である。

#一〇、この週から激しい自殺衝動が出て来る。虚しく、履修のことを考えるとぱつと飛び降りようかと。母は「自我殺し」の話しを繰り返して、何とか凌ごうと、面接を毎週に切り替える。

#一一、記憶が飛び、前後関係は無茶苦茶になり、空虚感

が強くなる。#一二、死への衝動は少なくなるが、退行し母親の乳房を触りにいく。#一三〜一七、気分のアップダウン激しく、過食し、腕を自傷する。

#一八、夏になりやや落ち着く。母親の胸に興味がいく。#一九〜二〇、面接の間隔が一ヶ月間は空く。過食は安定しているが、夏風邪が長引く。#二一、弟が大学に帰り淋しい。夢一「母親が自分の首を絞める。」

#二二、急に死にたくなりベランダへ、母親に止められる。母親といないと不安だと、母親が外国語非常勤講師を勤める大学に週二回一緒に行く。#二三、やはりベランダへ出て死のうとする。母親の乳房へのこだわりは少なくなり、父親はおもしろいことを言ってくれるとも。

#二四、死にたい衝動続く。そのことで入院した経緯も語る。小学校の時、母親は、兄、弟に興味があり、自分は母親に嫌われていたと。今は母親に自然に甘えられ、父親と自然に会えるようになって来た。

#二五〜二八、死の衝動続き、何度もベランダへ。わざと眼鏡をベランダから落したり、面接外でも電話して来て死にたいと。母はエゴサイドだから様子をみようかと返す。

X十一年二月〜X十二年二月

#二九、年が明け、父親と仲よくなり抱きついていったりといかにも少女的である。気分はやや高揚気味で、インターネットで知り合った友だち九人と三泊四日でスキーに行き、楽しく過ごしてくる。#三〇〜三二、死にたい願望の再燃、兄は帰国後しばらくカルチャーショックで不登校気味、自分は虐められたが皆勤していた。兄はまた抑うつとなって大学を休んでいたが復学に向かいつつある。自分は小四より、兄を拒否していた。#三三〜三七、死にたい願望の消長続き、安定した時期は少ない。母親は秋まで休学させるつもりと。弟は技術系大学院に進学が決まる。一方で母親への甘えは止めて自立しようとも。

#三八、安定して友だちとスキーに行くが、母親の胸へのこだわりは出現し、嫌なビジョンを見た。「自分が死にかけていて、もう自分は十分に生きたからよいかと。まわりに家族がいて、自分は涙を流して、手でさようならを言っている。」マイクロダイエットをして4kg減少したと。

#三九〜四四、死にたいと電話をかけて来たり、死の衝動は消長するなかで新学期を迎える。学校へは行き出すが、緊張感強く、母親の胸への退行的願望も強くなる。卒業までの単位八単位だけと意欲を示すが長く続かない。

#四五、生理前、卒論の発表会の前で緊張極度に高まり、「病気にした父親と祖母が憎い」と凄まじい怒りを顕わにする。また「それを分かってくれない母親も憎い」と、弟が大学入学時、祖母と兄と残されたことへの怒りを爆発させる。#四六〜四七、結局大学へは行けず意欲もなく、何度もペランダの柵に上ったりで、事態は深刻である。過食も進み、体重は七八kgになったという。

#四八〜五〇、抑うつ感強く、死にたい願望も消長する。夢見が悪いと本人は語る。夢二「兄にレイプされる。」夢三「仲の悪い祖母が出てくる。」夢四「飛び降りる夢。」連想は特にない。#五一〜五五、母親への退行的甘えが続く一方で、抑うつ感、死にたい願望、さらには殺人願望が出て来る。#五五では母親のみ来院し、最近是人を殺す夢が続く、夢五「私をこんなに太らせたのは母親だと言って殴っている」と報告する。八五kgまでになっていた体重が七四kgに減少したという。#五六〜五七と調子が悪く、死のうとして母親とペランダで格闘したと語る。卒論はプレッシャーとなっている。#五八〜六三、死にたい願望強く何度もペランダに出ることが続き、本人ももう入院したいという絶望的な気持のままこの年は暮れていく。



X十三年一月～X十三年一二月

#六四～七一、体重もまだ太るっているものの七〇kgまで低下し、死にたい願望も少なくなり、二泊三日でスキーに出かけたり、比較的安定した時期を過ごし、新学期を迎える。

新学期を迎え、卒論のガイダンスに行くつもりであったが結局行けず、#七十二では、虚脱感強く、死のうとして、ベランダから母親の携帯に「さよなら」とメールを送り、慌てて帰って来た母親のおかげで助かる。将来への不安強し。#七三～七九、気分の変動激しく、この間に三回のリストカットを行う。父親が嫌いという気持ちが再燃して来る。#八〇、過食の衝動が出て来る。自分が怠けているのではという自己嫌悪を語る。また「小さい時母親に嫌われていると思っていました。嫌われたくなかったから、母親が実父の介護に行く時も家事をしていた」という。

#八一～八七、過食の衝動に振り回される。水だけ飲んで嘔吐することも。極めて不安定で電話で死にたいと母に伝えて来る。#八八では、母親とともに薬の副作用でこんな状態になっているのではと治療不信を投げつけてきて、母がいくら説明しても納得しにくいとしくしく泣き続ける。当時S S R I を使っていた母もまた方向の見えなさや深い徒労感に苛

まされる。

#八九、やっと母のいうところの作業の意味が分かってきたとやや落ち着きを取り戻す。#九〇、夢六「尺取虫を母親がベランダで採っていた。大嫌い。目の前をうねうねしていた。」連想は小学校でバッタを採ったりしていたが、いつからか虫、昆虫は駄目となる。さらに小さい時、兄とは年子であり母親を取られた感じがあり、仲が悪かったが、小学校五～六年から仲良くなった。何故そうなったか分からないと語る。

#九一、卒論のプレッシャーで、死にたい願望が消長したり、多少意欲が上がったりする。過食嘔吐で八五kgあった体重が五三kgまで減少し、拒食も出て、さらに二kg減少する。#九二、父方祖母とのいきさつで傷ついたことを繰り返す。小さい頃は嫌ではなかったが、弟の大学入学で母親が家を空け、兄と三人に、祖母は兄を可愛がり、弟は頭が悪いと冷たい。それ以来ころころにぼっかり穴が空いたと語る。

#九三～九八、過食嘔吐がひどくなり、二時間かけて嘔吐を続け、体重は四五kgまで落ちる。自殺願望も強く、肘関節を彫刻刀で傷つけたりする。年末には毎日一～二時間かけて過食、三～四時間かけて嘔吐する。今なら悪いと思わず死ぬ

るかもと語り、混乱のうちにこの年は暮れる。

X十四年一月～X十五年八月

#九九、ここ三週間で普通の食事は一回のみ、後は過食嘔吐ばかり。父親が帰って来て、我慢出来たのは一日だけ。父親に怒った時だけ感情を感じず。過食して吐けない時、死んだ方が良くいとベランダの柵へ、母親は「死ぬ！やることない（止められない）！」と喚く。兄もスランプになって閉じ籠っている、この家には大変な嵐が吹いている。

#一〇〇～一〇四、栄子は病院まで来ているが、診察室に入らない。母のみと会う。本人は「話すことない」「先生が#九九の時『悲観的』と言ったのは自分のことを軽く考えている」と怒っていると言う。過食は続き、「死ぬことの恐怖はなくなった」と語っているという。

#一〇五、一ヶ月半ぶりに入室。「自分に怒るが人に対しては腹が立たなくなった。先生が『悲観的だな』と言ってアドバイスをもらえなかった。だから会いたくなかった。」何時頃からか人の顔を窺うようになった。小さい時父親に暗いと言われる。兄は仕事を辞め、弟は大学院を終えて、就職、家族みんなが遠くなっていく。過食嘔吐は続き、頭のなかでずっと音楽が聴こえている。

#一〇六、弟の就職活動で、母と共に、東京で一ヶ月生活する。母親が買物をしている間、自分が待たされることに腹が立ち、またそんな自分に腹が立ち、自傷行為、過食をしてしまう。

#一〇七～一一三、四月を迎え、また卒論プレッシャーで不安定になり、過食、死にたい願望でベランダに出たりすることが続き、事態は良くない。#一一四～一一五、父親が帰って来てプレッシャー。死にたい願望も強く、一〇～一五分ベランダの柵の上に乗っていた。「生き残ったら何かが変わる。死んだらもつけない」と。カウンセリングを受けてみる。#一一六～一一七、卒論の指導教官と二時間話す。少し前向きか。カウンセリングは午前は眠いので午後にして欲しいと翌週から診察とは別にカウンセリング五〇分を別枠で設定することを契約する。

#一一八、数日前に母親に強く訴え、泣き叫ぶ。「死にたくなかった。死んだらみんなに迷惑をかけるが、仕返しする気分もある」と。「祖母と二人にしてみんな行ってしまいうからこんなになった。」「人への怒りを向けられない分、自分に向けてしまう。」「頭に音楽が浮かんできて集中できない。」リスペリドン2mg追加する。#一一九、薬物、身体がだるいだ

けで効果なし。ペランダの柵に触って泣き叫ぶ。死にたい気持がこみ上げてくる。過食も続く。夢七「包丁を持って父をおどしに行く。父はくやしと思うならやってみると言う。全然攻撃出来ず、足の甲を刺すが傷がついていない。その後母と兄のところへ行く。兄は迷惑そう。母は足の甲を刺したのと慰めてくれる。」母は危ないと思い、精一杯フォローする。カウンセリングは次々週の土曜日、二回目である。#二〇〇、相変わらず音楽が聴こえてくる。木がさくさくいていたら必ず死にたくなるから、ペランダから中に入る。カウンセリングの二日前、母親より電話、「もつと生かせてやりたかったです」と自殺既遂の報告を受ける。

## 5、内的生活史と治療の経過の分析心理学的考察

筆者は痛恨の思いで、栄子の死を受け入れざるを得なかった。彼女のなかに布置してしまった死への願望はどんなふうにして形成されたのであろうか。

幼少時の五年間のヨーロッパ体験は何らかの形で影響を与えているであろうが、栄子は心的な外傷としては語らず、自由で楽しかったと述べる。渡欧したのは、二〜三歳の頃である。それから、小学校二年生までヨーロッパで過ごす。帰国

の一〜二年前に弟が生まれていることとなる。幼稚園から小学校一年にかけての頃である。この頃異国での弟の誕生を栄子はいかに受け止めていたのであろうか。優しいと語る彼女の自我とは別に、初めて自発的に述べられた夢一では「母親に首を絞められる」というネガティブな母親像が現れる。夢五では母親に太らせたのは母親だと攻撃を向け、夢六では大嫌いな尺取り虫と母親がいる。一方で治療の経過中ずっと退行症状があつて、母親の胸に触りにいく。このようなことを考えると、母親の幼少時の守りはいかなるものであつたかと考えさせられる。母親自身も異国での生活、出産と余裕があつたはずはない。摂食障害の症状とともに、退行し、原初的な母子一体感を求めているようである。

帰国してからの栄子の生活は虐められ体験、友達とは一歩距離を置く体験、中学、高校、大学受験と挫折の連続である。彼女の自我は、闘達ではなく、感情を抑え、表面上はそれなり取り繕うという構造となる。その破綻は中学三年時既に過食として現れる。初潮は一〇歳と比較的早い、それで降いかなる形で彼女のなかに女性性が育まれていったのであろうか。筆者が出会った二〇代でも栄子は儂い少女のようであった。父親との出会いも良いとは言えない。とりわけ、小学三

年時痴漢に会った時、彼はまともにとりあつてくれない。それ以来、父親にはこころを閉じているようである。在欧時の父親のイメージは何も語られない。ただ家父長的に進路を命令的に決める父親に強い憎しみを込めて語る。それでも、良き父親のイメージを求め、少女的に甘える栄子の姿の消長はあるが、長続きはしない。兄に対しては年子で、幼少時、兄に嫉妬を覚え、小学四年より兄を拒否していた、小学五、六年から仲良くなったがと語る。兄は小学三年時帰国し、適応がうまくいかず、しばらく不登校となつてゐる。栄子の方はいじめられても不登校にならなかつたのであるが、本格的な病に至る契機となる、弟の大学入学の時、祖母と兄と栄子の三人が家に残され、彼女が他二人の面倒を見て、祖母が兄ばかり可愛がるのが彼女には堪え難かつたようである。祖母は兄が頭がよいと特別に可愛がつていたという。兄はどこかサイコロジカルな問題を抱えているようで、何回か抑うつで休んでいるが詳細は不明である。しかし夢二では兄にレイプされている。語られない何かがあつたのであろう。弟は六歳も年下であるということから、母親以外でもっとも愛着を持つてゐるようで、スキーに一緒に行つたり、就職の世話を手伝つたりで、弟のことを語る時は表情が穏やかになる。

問題は父方祖母である。詳しいことは不明であるが、栄子は尋常ならざる程度にこの祖母を嫌つてゐる。父親はこの祖母の長男で、期待の星であつたことが窺われ、その祖母はあからさまに兄を可愛がり、弟は頭が悪いと疎んじたという。栄子は先述の祖母、兄、彼女と三人が残されたことの心的外傷体験を何度憎々しげに語つたことであらう。彼女の強い拒否で父親も折れざるを得ず、近くの県営住宅に祖母を独居させるのであるが、どんなやりとりがあつたのかは栄子も具体的に語らないし、賢明な母親も語ろうとはしない。父親の実は、祖母が県営住宅に入るといふことは、さほど裕福ではなかつたと推測されるし、おそらくは父親は知的に優れ、良い大学、大会社に就職し管理職まで昇進していることは祖母の自慢であるし、その価値観をそのまま一面的に孫達に適用してゐたと考えられる。一方母親は、欧州滞在で語学をマスターし、大学で教えられるほどの知力と、文化を持つてゐる。そこにある祖母・父親と母親・栄子の価値観の違いが、この別居に影響してゐたと想像しても無理はないであらう。

こうした状況のなかで、栄子の生は、思春期から娘時代へとまぐ通過儀礼を経ていかない。中学三年時の過食、ブルマーを履くことへの恥じらいは印象的である。思春期に女性

らしさが芽吹く反応として、多少脂肪がつき過ぎる状態も多々あることなのにもかかわらず、栄子はそれも許すことが出来ず、よけい過食へと悪循環を繰り返す。サイコセクシュアルにも、言葉では抵抗はないと栄子は言うが、小学三年、および入院時の痴漢事件や、何よりも父親からの疎隔、中学、高校、大学がすべて女子校というなかで異性から疎隔される。彼女は少女元型のなかでのみ生き、それ以外の可能性は過食となつて彼女を衝動的に襲う。この姿は筆者には、性、食べることを通して、身体、闇への通路へと入ることを禁じられた齋宮を思い起こさせる。少女らしい興味で走り回ることも出来ず、有名なアニメ『千と千尋の神隠し』の様に、神、闇の世界に行くことも出来ず、彼女のかろうじてあるという興味のあり所は、古代西欧の装飾品と日本の古代の埋葬品と語る。これらのアイテムも壮大なロマンを生み得る。しかし栄子にはそれを持続する力は抑うつのもとでは失われている。

しからは栄子のこの強い自殺への衝動は何だろう。何度ベランダから飛び降りようとしたことであろう。母親にメールを送ったり、いささか演技的な色彩を感じなくはないが、逆に考えれば、何故これほどまでに死への願望を弄ばなくてはならなかったのであろうか。もう既に栄子のこころのなかに

は死が布置されていたと語れば言い過ぎであらうか。『アモールとプシケー』では、王国の不毛から、三女で、美しい少女である何も知らないプシケーが魔物の生け贄に供される。それは待つべき死への花嫁であり、プシケーの場合は辛い魔物は、愛の神アモール（エロス）であり、命は助かるのであるが、ひとりの女性として成熟していくために想像を絶する苦悩を強いられる。そして最後は冥界の女王ペルセポネーのところまで行かなくてはならなかったのであるが、これを詳論することは本論をそれる。とまれここでは死に召されることが肝要である。栄子もまた死へ召されたのである。齋宮のように、性、身体からは切り離されることも死に等しい。我々の物語における「飯食わぬ女」も身体性から切り離される。この女性を物語の主人格と考えれば、ユング心理学的に考えると、女性の人的存在すら認めない徹底的な現実原則に添った吝嗇で貧しいアニムスの姿である。あるいは生命性を欠き、知的精神性のみを表す頭蓋骨あるいは頭部だけで表現されるアニムス像もある。女の頭部にある口とは知的に偏向して妖怪と化したイメージを連想させる。そのアニムスの要請に応えようとすれば、本来の女性的部分は妖怪と化して頭部にある口に食べ物を放り込む姿をとって、終には、男性をも

飲み込む太母の否定的側面へと通底する。幸いなことから、不幸なことか分らないが、物語では、妖怪、鬼婆と化した、女性の本来的部分は、よもぎとしようぶという呪物によって

退治されるのであるが。栄子の場合には、幼少時の保護薄く、父母、取り分け母親の気にいるよう生きてこなければならぬいなかで強化された超自我構造のために、深く抑圧された攻撃性は自罰的となって自分に向く。自殺願望である。治療者はこの死の布置にエゴサイドで対応しようとしたが残念ながら通用しなかった。

エゴサイドという概念が通用しなかっただけでなく、治療の経過で筆者は大きな間違いを二つ起こしている。ひとつは、#九九で、栄子が自分の陥っている苦境を述べた時、筆者は「悲観的だな」と反応し、その言葉が彼女をひどく傷つけ、怒り、攻撃性を刺激した。あとで考えると、この時期は父親への怒り強く、過食嘔吐に苦しめられ、死の衝動からベランダへ走り、母親が必死で止め、兄もまた調子を崩し、彼女の家全体が激しく軋轢を起こしていたのである。その時、彼女は治療者に受け止めて欲しかったに違いない。その彼女の思いの強さからすれば、筆者の言葉はその気持を突き放した形になったのであろう。彼女は怒りと抗議を込めて病院に来る

が、診察室に入らない態度を#一〇五まで取る。筆者には痛い体験であった。ここには、彼女の異性への、とりわけ父親への否定的感情、怒りの転移がある。

筆者のまずい対応から刺激された転移を含めての怒りは一ヶ月半ほどで修復され、そして関係はより深まったと筆者は感じていた。栄子もそうであったのであろう、彼女も慎重に避けて来たカウンセリングに入ることをおよそ半年後に希望し、隔週で設定することになる。そして一回目のカウンセリングが終って次のカウンセリングまでの間の診察で、夢七を見る。父親に対する無力感である。足の甲を刺しても傷もついでいない。筆者は咄嗟に危ないと思って、何とかフォローするが、とんでもない危険性を感じたのである。そして予感通りカウンセリングの予定日より二日前、母親より自殺した旨連絡があり、母親は「もっと生かしてやりたかった」と告げる。診察とカウンセリングと治療構造の二重化にまつわる危険性に無自覚過ぎたことがふたつ目の誤りである。ここには栄子の持つている儂さ、透明感に対する筆者自身の逆転移があったことを否定出来ない。今でも、あの段階で、サイコロジストにカウンセリングを委ねることがよかつたかどうかについて迷いはあるにしても、何故ならこのことは、ひとつ

間違えれば、栄子の見捨てられ不安を刺激するからである。

### おわりに

摂食障害の問題を昔話の解釈と栄子の事例とともに論じて来た。プシケーと違って、あの世に召された栄子の身からすれば、まだまだ考察が不十分である。筆者は、母親とは何度もあつて、栄子を何とか支えようとする親心は充分ある優しい母親であると感じている。ここでは摂食障害の家族成因論を論じたのではない。生育史のなかで、誰が悪いという訳でもなく、少女元型に閉じ込められ、死の願望が布置され、召されてしまう巡り合わせ、生きてあることの、人間の運命の悲しさを述べたかったのである。そして、これだけの死にたい願望の繰り返しは、逆に生きたいからこそ、栄子はかように繰り返したのだとも思う。そのことを充分汲み取ることの出来なかつた、治療者としての筆者は痛恨の思いである。せめてこうして儂くも、死への願望を通して生への願望を表現し、そして召されていった栄子の生きた形跡を記録に残しておきたかったのである。栄子はもちろん仮名で、経過も意味を損なわない程度に改変している。

### 註

- (1) 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳、DSM-IV『精神疾患の分類と診断の手引き』AMERICAN PSYCHIATRIC ASSOCIATION、医学書院、一九九五年、二〇五―二〇七頁。
- (2) 中沢新一、『ミクロコスモス』四季社、二〇〇七年、一四五―一五一頁、引用部分、一四九頁。
- (3) 横山博、「表現の砦としての身体」河合隼雄編『講座心理療法 4 心理療法と身体』岩波書店、二〇〇〇年、九〇―九六頁。
- (4) 横山博、「精神科医からみたスーパーヴィジョン」藤原勝紀編『現代のエスプリ別冊、臨床心理スーパーヴィジョン』至文堂、二〇〇五年、六七―七七頁。
- (5) 下坂幸三、『アノレキシア・ネルヴォーザ論考』金剛出版、一九八八年。
- (6) 関啓吾編、『こぶとり爺さん・かちかち山―日本の昔ばなし (I)』岩波書店、一九八二年、一六二―一六三頁。
- (7) 五来重『「食わず女房」と女の家』小松和彦編、『怪異の民俗学 5 天狗と山姥』河出書房新社、二〇〇〇年、三〇七頁。
- (8) 泉鏡花、『夜又が池・天守物語』岩波書店、一九八四年、六一―七五頁。
- (9) Andersen, H.C. *The Little Sea Maid, THE COMPLETE ILLUSTRATED STORIES OF HANS CHRISTIAN ANDERSEN*, CHANCELLOR PRESS, 1989, pp543-559.
- (10) 小松和彦編同掲書、三〇五―三二〇頁。

- (11) 稲田浩二他編『縮刷版日本昔話事典』弘文堂、一九九九年、三〇二―三〇三頁。
- (12) Rosen, D. *Transforming Depression*. 横山博監訳『うつ病を生き抜くために』人文書院、二〇〇〇年。
- (13) Neumann, E. 河合隼雄監修『アモールとプシケー』紀伊國屋書店、一九八五年。